KYOTO IMPERIAL PALACE

京都御所

一般公開

建礼門

宮内庁京都事務所

京都御苑

宮内庁京都事務所

〒602-8611　京都市上京区京都御苑3

TEL　075-211-1211(代)

URL　http://www.kunaicho.go.jp/

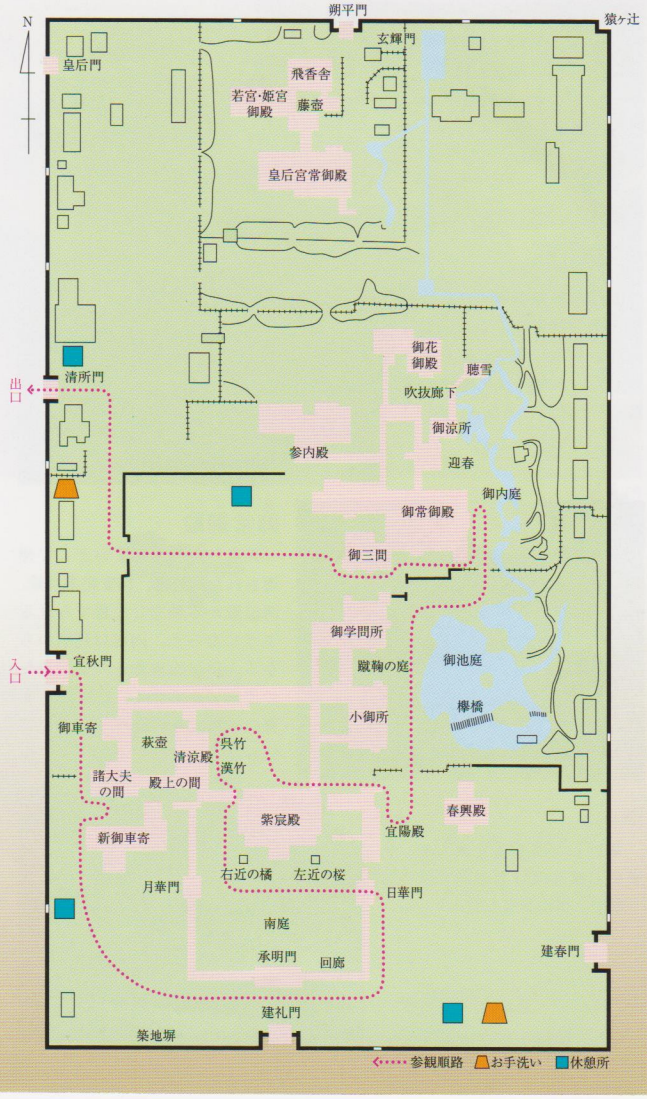
京都御所

延暦13年(794)桓武天皇が遷都された平安京の大内裏の中ほどに天皇のお住まいである内裏(皇居)があった。内裏が火災に遭うと、天皇は貴族の私邸など京中の殿邸を仮皇居とされた。これは里内裏と呼ばれるが、平安時代の後期以降、元の内裏は次第に使用されなくなり、里内裏が日常の皇居とされるようになった。

現在の京都御所は、土御門東洞院殿といわれた里内裏が発展したものである。光厳天皇が元弘元年(1331)ここに即位されて以後、明治2年(1869)に明治天皇が東京に遷られるまで皇居とされた。その間には焼失と再建が繰り返され、現在の建物のほとんどは、安政2年(1855)に再建されたものである。

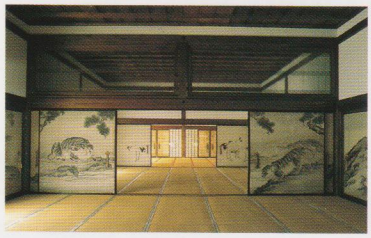
京都御所では、紫宸殿、清涼殿等の平安時代以来の寝殿造りや、御学問所、御常御殿等の後世における書院造りなど、宮廷の長い歴史を反映した様々な建物の様式をみることができるほか、いにしえの天皇の御生活や儀式・政務、源氏物語などの王朝文学の世界を偲ぶことができる。

築地塀で囲まれた京都御所の面積は約11万㎡である。



御車寄（おくるまよせ）

昇殿を許された者が参内する時の玄関で、諸大夫の間（しょだいぶのま）や清涼殿、小御所等と廊下でつながっている。



諸大夫の間（しょだいぶのま）

参内した者の控えの間で、身分の上下によって異なった部屋に控えた。襖の絵にちなんで、格の高い順に「虎の間」、「鶴の間」、「桜の間」と呼ばれる部屋が並ぶ。「諸大夫の間」は本来桜の間を指すが、総称ともなっている。

新御車寄（しんみくるまよせ）

大正4年（1915）の大正天皇の即位礼に際し、建てられたもので、大正以後の天皇皇后両陛下の玄関である。

紫宸殿（ししんでん）

即位礼などの重要な儀式を執り行う最も格式の高い正殿である。大正天皇・昭和天皇の即位礼もここで行われた。入母屋桧皮葺きの高床式宮殿建築で、南面して建てられている。中央に天皇の御座「高御座（たかみくら）」、その東に皇后の御座「御帳台（みちょうだい）」が置かれている。現在の高御座と御帳台は、大正天皇の即位礼に際して造られたもので、今上陛下の即位礼の際には、東京の宮殿に運ばれて使用された。

前面には白砂の南庭（だんてい）が広がり、東側に「左近（さこん）の桜」、西側に「右近（うこん）の橘」が植えられている。

清涼殿（せいりょうでん）

平安時代には天皇が日常の御生活の場として使用された御殿で、入母屋桧皮葺きの寝殿造りである。現在の建物は平安時代のものより小さくなっているが、古制に則って建てられ、主に儀式の際に使用された。元は日常の御殿であったため内部は襖などによる間仕切りが多くなっている。中央には御休息の御帳台があり、その前（東側）に置かれた厚畳は「昼御座（ひのおまし）」という御座である。その南、屏風前の漆喰で塗り固めたところを「石灰壇（いしばいのだん）」といい、地面になぞらえてここから伊勢神宮等を遙拝された。昼御座の前にある弘廂には、北側に「昆明池障子（こんめいちのしょうじ）」、南側に「年中行事障子」が立てられている。

小御所（こごしょ）

諸種の儀式が行われ、武家との対面にも用いられた。寝殿造りと書院造りの両要素が混合した様式の建物である。

慶応3年（1867）12月9日の王政復古の大号令が発せられた日の夜、「小御所会議」がここで行われた。昭和29年（1954）に焼失、同33年に復元された。

御池庭（おいけにわ）

池を中心とした回遊式庭園である。前面は洲浜で、その中に舟着への飛石を置いている。右手に欅橋が架かり、対岸には樹木を配し、様々な景色を楽しむことができる。

蹴鞠の庭（けまりにわ）

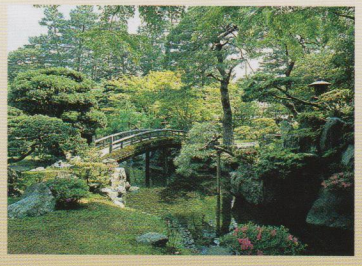
小御所と御学問所の間の小庭をいう。蹴鞠は鹿革でできた鞠を落とさずに蹴り渡す球戯で、一定の作法のもとに行われる。この場所で蹴鞠が催され、天皇が御覧になった。

御学問所（おがくもんじょ）

御読書始めの儀、和歌の会など学芸関係のほか、臣下と対面される行事などにも用いられた。入母屋桧皮葺きの書院造りの建物である。

御常御殿（おつねごてん）

天皇日常のお住まいとして使用された御殿で、16世紀末以降、清涼殿から独立して建てられるようになった。内部は15室からなる入母屋桧皮葺きの書院造りの建物である。この御殿から北側は、奥向きの御殿といわれている。

御内庭（ごないてい）

曲折した遣（や）り水を流して、土橋や石橋を架けた趣向を凝らした庭で、奥に茶室を構えている。